

生徒会役員と放送部員が取り組んだ平和研修活動。地域の人々と交流して紡ぎだした平和の思いを、長崎新聞社の高比良記者が「書きたい記事」として連載。ぜひ、ご覧ください。

戦後八十年 つながる思い「五竜号物語」 ■1■

令和7年3月6日(木) 「未来へ託した平和」

2025年(令和7年)3月6日 木曜日

紙面編集・宮崎智明

56・8676) 南島原 (0957・82・0201)



早高の生徒会役員と放送部員が取り組んだ平和研修活動。地域の人々と交流して紡ぎだした平和の思いを、長崎新聞社の高比良記者が「書きたい記事」として連載。ぜひ、ご覧ください。

タイムカプセル

未来へ託した平和

戦後80年 つながる思い 「五竜号」物語

うき道いし かの山
小ぶなつりし かの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき ふるさと

で歌うのは、県立諫早商業高の生徒と卒業生約20人。1944年12月12日、軍民共用の輸送機「五竜号」が五家原岳の山中に墜落し、軍人を含む12人が死した。慰霊碑は、同町の深海地区財産管理組合(当時)が68年に建立したものだ。この歌を選んだのは、碑にまつわる歴史を調べてきた同町の住民グループ「あけぼの会」の希望。中清忠さん(81)は「古里から遠い地で犠牲となった人たちがこの歌なら聞いたことがあるはず。若い人の清らかな声で安らかに眠ってほしい」とその理由を語った。

2019年の夏の終わり。当時、長崎新聞諫早支局に勤務していた記者が、市歴史・美術館の大島大輔専門員に市内に残る戦争や原爆の遺構を尋ねた。「戦時中、五家原岳に墜落した飛行機の慰霊碑があり、多良野グリーンロード沿いに案内板が見えます」



戦争は過去のものではなく、その記憶は身近な場所にあった。五竜号に関する史実を掘り起こす市民と、その思いに寄り添う県立諫早商業高生の活動を追った。

「開封する時」私は100歳。30代後半になった生徒たちが平和に暮らし、さらに若い人たちに五竜号のことを伝えてほしい。中清さんは、生徒一人一人に手を振って別れた。「また会いましょう」

「五竜号」慰霊碑は、20年後に再び集まり、開封するという未来への約束。その間、後輩らに五竜号の事実が語り継がれることを願う」と語った。

(高比良由紀)

地域総合

「五竜号」慰霊碑に手を合わせる(右から)前田さん、中清さん、嘉村さん
—2019年10月、諫早市高来町



山林の中の慰霊碑

知られざる史実に光

戦後80年
つながる
思い
「五竜号」物語

■2■

「五竜号の慰霊碑の場所を存じないですか」
2019年夏の終わり、諫早市の戦争、原爆の遺構を取材していた記者は、地域の歴史を熱心に研究している中清忠さん(81)に同市高来町に電話した。

第2次大戦中、五家原岳に墜落した飛行機の慰霊碑が山中にある。多良岳グリーンロード沿いの案内板通りに行っても見づからなかった。経緯を説明すると、こう返ってきた。「五竜号?初耳ですね」

数日後、事態は動き始めた。中清さんは慰霊碑を探するために五家原岳へ向かい、案内板に沿って細い砂利道に入った。別の案内板が指す先は、草が生い茂った獣道。やむなく進むと、碑近くの林道に合流し、高さ十数メートルのヒノキが立ち並ぶ中

に、黒ずんだ碑を見つけ、記者も連絡を受け、後日、現地へ向かった。中清さんと地域活性化活動を続ける「あけぼの会」の前田俊さん(79)、嘉村徹さん(75)も一緒だった。100メートルの巻き尺を4人で交互に持ち、同ロード沿いの案内板から碑までの距離を測った。碑の周辺には、カップ酒の割れた瓶や古びた造花が散らばり、長年、人が立ち入った形跡は感じられなかった。線香をたき、手を合わせた。

碑の側面には墜落事故の経緯が刻まれ、当時の状況が分り始めた。昭和19年2月12日、陸軍少将、森本義一氏ら11人が搭乗し、犠牲となった。この間、中清さんは五竜号に関する記録を探した。インターネットで五竜号と検索すると、搭乗員の遺族の孫が運営するブログを発見。同町の寺院(天初院)で50回忌法要(1993年)が営まれたことが分かった。さらに、事故直後、同町の葉落葉会所に安置されていた犠牲者を自撃した男性にたどり着いた。知られていなかった史実に光が

少しずつ当たり始めた。諫早、長崎両市の図書館に出向き、五竜号が墜落した44年2月12日以降の新聞をめくったが、事故を報じる記事はなかった。「軍の飛行機が山中に落ちて、12人も亡くなったのに、まったく記録がないなんてなげた」。戦時中、報じられなかったことへの疑念が、中清さんをかき立てた。

懸命な調査に頭が下がっている一方で、気になっていた疑問をぶつけた。「なぜここまで動いてくれるのですか」すると、中清さんと前田さんは目を伏せがちに切り出した。「私たちの父親はあの戦争で亡くなりました」(高比良由紀)

地域総合

回収した機体の部品を見つめる(左から)前田さん、立野さん、中溝さん、高村徹さん
＝諫早市高来町



父と同じ戦争の犠牲者

「見も知らぬ土地で」

戦後80年
つながる
思い
「五竜号」物語

■ 3 ■

第2次大戦中の1944年2月12日、諫早市高来町の五家原岳に墜落し、乗員12人が死亡した軍民共有の輸送機「五竜号」。同町の深海地区山林財産管理組合(当時)が68年、山中に慰霊碑を建立し、住民に語り継がれていた。

記者の問い合わせをきっかけに、同町の住民グループ「あけぼの会」と戦時中の歴史調査に取り組み福岡の市民団体が2019年9月以降、墜落前後の状況を調べた。

五竜号は当時の大日本航空に所属し、旧日本陸軍が借り上げていた。機体は三菱製の重爆撃機。軍民共有の航空機は戦時中、中国やアジア各国と日本を結ぶ役割があった。墜落した日は台湾から福岡の飛行場に向かう途中、天候不良で山中に墜落。軍幹部の司政長官ら乗員7人と乗員5人が死亡したことが分かった。

墜落場所の特定を目指し、同会は4回、碑近くの山中を金属探知機で捜索。ジュラルミン製とみられる金属片や部品など約120点を回収した。大きく曲が

った部品は、墜落の衝撃を今に伝える。並行して、同会は碑までの案内板の再設置などを進めた。同会は旧北高来町の青年団が母体。卒団後も地域おこしに尽力してきたが、当初は「会で取り組む話ではないのではないか」という声も上がった。立野政美さん(76)は学生時代、碑周辺の山林の下払いに駆り出された。「この辺に戦時中、飛行機が落ちちゃけたと聞いていた」

第2次大戦に出征した父親が戦病死した前田俊さん(79)。現在、市連合遺族会副会長で同会高来支部長を務める。中溝さんの熱意に心動かされ、五竜号の史実を調べ始めた。前田さんの

父親は終戦後、乗っていた船が沈没。船から脱出し、泳いで逃げたが、入院先の病院で息を引き取った。35歳。前田さんが生まれてわずか半年後だった。中溝さん(81)の父親は1945年8月21日、フィリピンで戦死した。36歳だった。石ころのようなものが入った木箱が届けられた。遺骨は戻ってきていない。前田さんも中溝さんも父親の記憶がないまま年を重ねた。

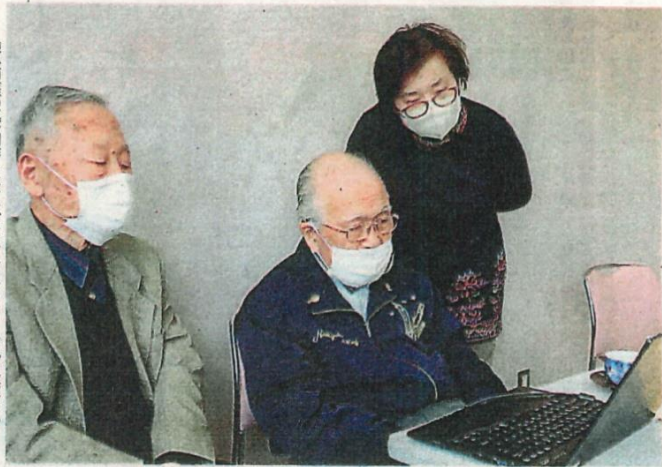
この間、中溝さんが見つけた五竜号の犠牲者遺族のブログをきっかけに、犠牲者12人のうち遺族4人と連絡がしたが、墜落を巡る史実を詳しく知る人はいなかった。中溝さんと前田さんは口をそろえる。「見も知らぬ諫早の地で突然、命を落とした人たちが戦争の犠牲者。私たちの父親と同じ犠牲者」

同会は遺族を招き、犠牲者の77回忌法要(2022年)を営み、遺族主催の80回忌法要(24年)にも協力した。会員の高齢化もあり、犠牲者全員の名前を刻んだ新たな碑も建て、深海山林財産管理組合が見守る。(高比良由紀)



金属探知機で土中の破片などを探すあけぼの会会員
＝2020年9月、諫早市高来町

地域総合



諫早商業生が制作したテレビドキュメンタリーを見る大塚さん(中央)

偶然の出会い

戦後80年
つながる
思い
「五竜号」物語

身近にある戦争の爪痕

出合いは偶然だった。
2022年9月、諫早市
高来町の住民グループ「あ
けほの会」の立野政美さん
(76)と中溝忠さん(81)は、
市老人クラブ連合会の研修
会に赴いた。県立諫早商業
高の平和研修の映像を見た

■ 4 ■

後、会場にいた同校の中野
聖子教諭(61)に話しかけ
た。「私たちが調べてきた
地域の戦争の記憶も聞いて
ください」
2人が言う戦争の記憶と
は、第2次大戦中、同市
の五家原岳に墜落した軍民
の五家原岳に墜落した軍民
の五家原岳に墜落した軍民
の五家原岳に墜落した軍民

る大塚さんのほか、当時、
同校演劇部の男子生徒が父
親役となり、手紙を朗読す
る姿を同校放送部が撮影し
た。同連合会役員らが出来
栄への良さに感激し、研修
会で披露したのだ。

旧日本軍の軍医だった大
塚さんの父親は1944年
12月、ニューギニアで戦死。
大塚さんが2020年、母
親の遺品の中から手紙を見
つけた。1939年11月か
ら44年初めまでに送られた
3806通。部隊での日常生
活などがスケッチを添えて
記されていた。大塚さんは
2022年、書簡集「戦地
の爪痕」を制作し、家族と引き
離される戦争の不条理さに
迫り、22年度九州高校放送
コンテストで優勝した。

大塚さんは「父が戦地か
らどんな気持ちで手紙を書
いて送ったのか、孫のよう
な高校生が真剣に向き合
い、共感して読んでくれた
のが分かり、うれしかった
と振り返る。

23年春、この年の平和研
修に向けて、生徒会担当の
教諭が立野さんに電話し
た。同年7月、立野さんと
中溝さんを招き、五竜号墜
落を巡る調査について聞い
た。山中の慰霊碑周辺の地
中から部品など120点を
掘り出した話。インターネ
ットで見つけた犠牲者遺族
との交流、戦死した父親に
対する思い。

とつとつと語る中溝さん
に生徒たちは引き込まれ
た。「80年近く前の出来事
でなく、戦争の爪痕と傷を
抱えた人が私たちの身近に
いる」
祖父と孫ほどの年が離れ
た同会と高校生。思いがつ
ながる物語が始まった。
(高比良由紀)



テレビドキュメンタリー制作を振り返る諫早商業高校放送部
 諫早市高来町 同校

心清らに歌うなり

戦死した父 思い重ね

戦後80年
 つながる
 思い
 「五竜号」物語

■ 5 ■

県立諫早商業高は毎年夏、生徒会を中心に平和研修に取り組み、全校生徒に発表している。2023年のテーマは第2次大戦中、諫早市高来町の五家原岳に墜落した軍民共用の輸送機「五竜号」を巡る歴史だ

同年7月、同町の住民グループ「あけぼの会」の中溝忠さん(81)らを学校に招いた。墜落前後の状況を丹念に調べる姿に触れ、「記者魂」に火が付いたのは放送部員。ラジオドキュメンタリー「いつの日か」を制作し、同年11月の九州高校放送コンテスト県大会に応募したが、次点で県代表を逃した。次はテレビドキュメンタリーにしようかと、当時の部長、峰幸歌さん(18)はカメラを回した。

初めて加わった。父親が戦死したとされるサン・マリナーの南約200㌔地点まで行った。「もう少し近づきたいという思いがある。生まれ初めて『お父さん』と大きな声で叫んだ」

この話を聞き、峰さんは中溝さんを中心にした番組にしようと思った。「戦争は遠いイメージだった。中溝さんがフィリピンで『お父さん』と叫んだと聞いた時、私たちはその思いを忘れてはいけないと感じた。番組作りの手法はさまざまあるが、五竜号を巡る出

訪れた際、中溝さんの希望で歌った「ふるさと」にちなんだ。1年半かけて取材した番組は24年度のNHK杯全国高校放送コンテストのテレビドキュメント部門で入選。全国トップ20に入る快挙だった。

峰さんはこう振り返る。「(中溝さんが)ひと言ひと言をどんな気持ちで話したのかを考え、自分の中で深掘りしながら作った。その話を聞いた生徒が何をどのように感じたのか、という趣旨が多くの人の心に響いたのがうれしかった」

戦死した父親への思慕、五竜号の犠牲者に誓う不戦不降の決意が、次世代につなげたい。「次世代にお願いしたい」。中溝さんの願いに峰さんらは心を寄せた。

(高比良由紀)

に初めて加わった。父親が戦死したとされるサン・マリナーの南約200㌔地点まで行った。「もう少し近づきたいという思いがある。生まれ初めて『お父さん』と大きな声で叫んだ」

この話を聞き、峰さんは中溝さんを中心にした番組にしようと思った。「戦争は遠いイメージだった。中溝さんがフィリピンで『お父さん』と叫んだと聞いた時、私たちはその思いを忘れてはいけないと感じた。番組作りの手法はさまざまあるが、五竜号を巡る出

訪れた際、中溝さんの希望で歌った「ふるさと」にちなんだ。1年半かけて取材した番組は24年度のNHK杯全国高校放送コンテストのテレビドキュメント部門で入選。全国トップ20に入る快挙だった。

峰さんはこう振り返る。「(中溝さんが)ひと言ひと言をどんな気持ちで話したのかを考え、自分の中で深掘りしながら作った。その話を聞いた生徒が何をどのように感じたのか、という趣旨が多くの人の心に響いたのがうれしかった」

戦死した父親への思慕、五竜号の犠牲者に誓う不戦不降の決意が、次世代につなげたい。「次世代にお願いしたい」。中溝さんの願いに峰さんらは心を寄せた。

(高比良由紀)

県南県央・老岐対馬

諫早 (0957・22・0118) 大村 (0957・5
西海 (0959・22・0352) 対馬 (0920・5

戦後80年
つながる
思い
「五竜号」物語

■ 6 ■

県立諫早商業高の放送部が1年半かけて取材、制作したテレビドキュメンタリー「心清らかに歌うなり」は、2024年度のNHK林全国高校放送コンテストのテレビドキュメント部門で入選した。同部が手がけたテレビ、ラジオ番組は毎年のように全国、九州大会で上位入賞を続けている。

同部を支えるのは、被爆2世の中野聖子教諭(61)。これまで県内5校で放送部顧問を経験し、20年4月に同校赴任後、生徒会担当と放送部顧問を務める。

父親の畑野昭雄さん(97)は17歳の時、学徒動員先の三菱長崎兵器製作所茂里町工場で被爆した。中野教諭が父の被爆を知ったのは被爆50年の年。長崎工業経営専門学校(現在の長崎大経

被爆2世の教諭

二度と戦争させないために



生徒の合唱を指揮する中野教諭
|| 諫早市高来町



「戦争をさせない努力が大事」と語る犬尾さん
|| 諫早市泉町

済学部)生の体験を収録した「原子女の青春」を渡された。今は記憶が薄らいでいるものの、原爆の日の出来事を尋ねると語りだす。「父は『被爆者だけが被害者ではない。戦争そのものが悪い。反対というだけではだめだ』と言う」。中野教諭は、戦争経験者ならでの平和観に心を寄せる。

長崎で平和教育のテーマに取り上げるのは原爆が多い。諫早で地域の戦争を見つめ、若い世代に伝える人たちに出会った。高来町の市民グループ「あけほの会」、戦死した父親の手紙を本に編んだ大塚祥さん(88)。そして、もう一人忘れられないのが元医師、犬尾博治さん(91)。同部が犬尾さんをテーマに制作したテレビドキュメンタリー「語り継ぐ力」は21年度九州高校放送コンテストで奨励賞に選ばれた。

犬尾さんは幼い頃、同市小長井町沖に墜落した米軍機B29を見に行き、搭乗員の遺体を目撃した。B29に体当たりした旧日本軍の零式艦上戦闘機が高来町の山中に墜落し、坂本幹彦中尉(その後、少佐に昇進)が死亡した経緯も知った。地域住民と協力し、B29と坂本中尉の慰霊碑を両町に建立。あの戦争で犠牲となった日米の兵士を追悼し、両国の友好を願う。

地域の戦争をテーマにした番組を作る高校生に、犬尾さんはこう託す。「敵も味方も関係なく殺し合う戦争はむごい。私たちは知らなければいけない。戦争をしない。そして戦争をさせないための努力が必要」

被爆地から離れた諫早の地で普通に暮らす市民たちが紡ぐ平和。それを受け継ぐと記録する高校生。

中野教諭は言う。「生徒たちは今、人や地域とのつながりを意識していないかもしれない。年月を経て、活動を思い起こした時、人や地域とのつながりの大切さがきつと分かるだろう」

(高比良由紀)

県南県央・吉岐対馬

諫早 (0957・22・0118) 大村 (0957・
西海 (0959・22・0352) 対馬 (0920・

タイムカプセルを埋設後、記念撮影する諫早商業高生と卒業生、あけぼの会、深海山林財産管理組合員ら
＝2月15日、諫早市高来町の五竜号慰霊碑そば



記者ノート

市民作った継承の形

戦後80年
つながる
思い
「五竜号」物語

7.完

「書きたい記事」と「読者が求める記事」。そのバランスを取りながら日々、書く意味を考えているが、この連載は「書きたい」という気持ちが勝った。不思議なほど、つながっていった人と人の縁があり、市民が消えかかった地域の戦争の記憶を調べ、行動し、次世代にバトンタッチするという新しい継承の形が生まれていた。

第2次大戦中、諫早市の

五家原岳に墜落し、乗員12人が犠牲となった軍民共用の輸送機「五竜号」の史実に光を当てた同市高来町の住民グループ「あけぼの会」の熱意と行動力が、うずもれていた記録と人々の記憶をよみがえらせた。山中の慰霊碑周辺を広場にしたり、地元の中学校などで語り継いだりしている。

さらに県立諫早商業高の生徒会が話を聞き取り、放送部が映像と音声で残した。同部はこの前にも、日米の戦死者を悼む大尾博治さん(91)と、戦死した父親の手紙を通して不戦の思いを伝える大塚梓さん(88)をテーマにした番組をそれぞれ制作。「不戦の思いを若い世代に伝えたい」。あけぼの会、大尾さん、大塚さんの願いを同校生が受け止めた。

報道機関や世代を超えた伝える側の継承の瞬間にも出合った。五竜号犠牲者の80回忌法要が昨年2月12日、同町の寺院で営まれた。記者も参列し、それまでの経緯を説明するはずだったが、新型コロナウイルス感染症にかかり断念。落胆していたところ、その日うちに共同通信社が配信した法要の記事をスマートフォンで目にして驚いた。

取材したのは同社長崎支局の森山遼記者(27)＝広島県出身＝。原爆を中心に過去の戦争を考え、風化を防ぐための仕事をしたいと希望し、長崎に赴任したと後日聞いた。同じ思いを抱く若い記者の存在は心強く、うれしかった。同会が確認したところ、全国40の地方

紙・スポーツ紙に掲載。反響の大きさに同会会員が一番驚き、喜んでいった。犠牲者の1人、旧日本陸軍の須田重蔵大佐の孫、田中麻子さん(東京在住)がこの法要で語った言葉が、同会などの動きをすべて物語っていた。「諫早の皆さんのおかげで(犠牲者の)存在意義という新しい命を吹き込んでもらった」

命を吹き込んだ1人、同会の中溝忠さん(91)は先月15日、同校生が慰霊碑そばにタイムカプセルを埋設した数日後、フィリピンに向かった。父親が戦死した場所近くまで行き、分かったことがある。「終戦直後、日本への帰還船が待っているという情報があり、武器も食料もない中、望みをかけて(ルソン島北部の)港へ向かったのではないか。線香をたき、手を合わせてきた中溝さん。父親の命をたどる旅はこれからも続

(高比良由紀)